

越後佐渡おもしろ歴史ばなし

特定歴史公文書にみる 2002 年ワールドカップ招致の記録 ～新潟の歩みと、継承されるサッカー文化～

2026 年、サッカーの北中米ワールドカップが開催され、日本代表の活躍は国内外で注目されました。

新潟県の特定歴史公文書の中に、1994 年から 1995 年に作成された『ワールドカップ誘致関係文書』があり、2002 年の日韓ワールドカップ開催に至る新潟県の誘致活動の取り組みが記録されています。

ワールドカップの出場未経験であり、Jリーグ発足直後だった当時の日本や新潟において、官民一体となって行った招致活動への取り組みが、今日の日本や新潟のサッカー文化の発展の基礎となったことを想起させます。

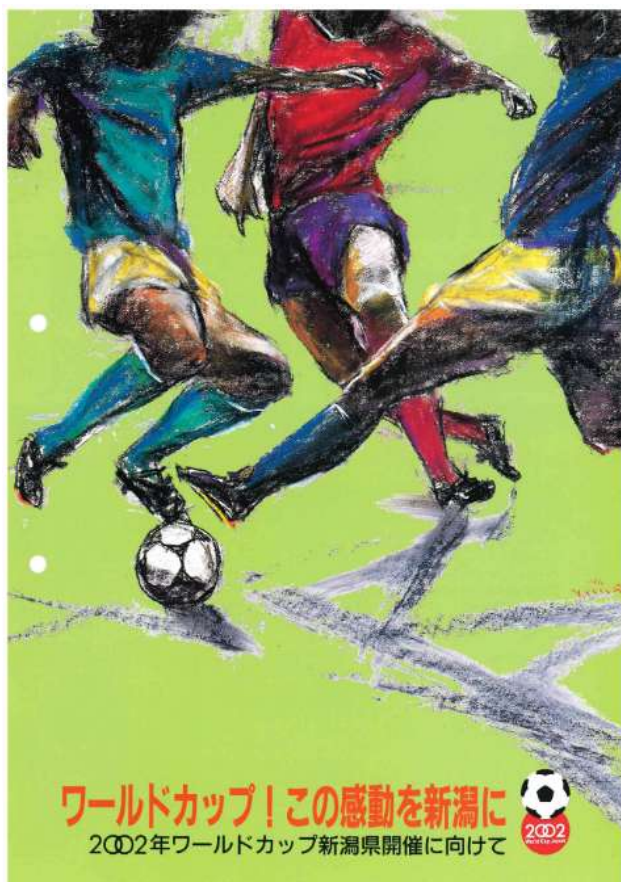
日本が 2002 年ワールドカップ招致を目指した端緒は、1986 年のメキシコワールドカップを視察した日本サッカー協会 (JFA) が、自国開催による競技普及と強化の重要性を認識し、1989 年 11 月に「2002 年 W 杯」の招致方針を公式に表明したところから始まります。結果として、この動きはワールドカップの自国開催を念頭に、国内のプロ化構想を加速させ、1993 年の Jリーグ発足を力強く促す契機となりました。

そうした情勢の中、新潟県では、1992 年に「2002 年ワールドカップ新潟県招致委員会」が設立され、「鳥屋野潟公園計画」および 2009 年国体構想と連動させる形で招致参入を決定します。県はワールドカップの試合開催要件を満たす 4 万人規模の全天候型多目的スタジアム (後のビッグスワンスタジアム) 構想を掲げ、県民から寄せられた数多くの署名とともに招致手続きを進めました。

当初から、JFA や開催地候補各自治体は、日本単独の開催を想定し準備を進めていました。しかし、1996 年 5 月 31 日、FIFA 理事会において日本と韓国による共催が決定しました。これにより国内での開催試合数は当初予定から必然的に半減し、従来の単独開催を前提とし、エントリーしていた新潟県を含む「15 自治体」すべてでの開催が困難な情勢

となり、各自治体と事前に交わっていた試合数などの『覚書』の前提が大きく揺らぐこととなりました。

公文書からは、共催決定直後の JFA と自治体間のシビアな調整過程が確認できます。出場参加国数を増やすことで試合数の増加を図る案などが FIFA に申し入れられましたが、受け入れられませんでした。最終的には、JFA の定めた評価基準のもとで、各自治体は選考を待つ構図となりました。新潟県も、選定直前に「選出」「不選出」「決定延期」の 3 パターンの危機管理文書を作成して選考結果発表に臨んでいたことがわかります。そして、その日 1996 年 12 月 25 日、新潟県は、国内 10 会場の一つとして正式に選定されました。



2002 新潟県ワールドカップ招致委員会作成
パンフレット表紙 (請求番号: Q09 総県スポ4)

文書館・歴史公文書室は、鳥屋野潟の北岸にあり、その対岸(南岸)に立つビッグスワン建設の経緯を伝える特定歴史公文書を保管しています。2001年に竣工した同スタジアムは、2002年W杯での3試合開催をはじめ、2009年新潟国体のメイン会場、そしてアルビレックス新潟のホームとして、地域のス

ポーツ文化の拠点であり続けています。

【主な参照資料】

新潟県法務文書課歴史公文書室所蔵
特定歴史公文書(Q09 総県スポ4～6)

令和8年度企画展 紹介

2階の閲覧室及び1階のエントランスホールでは、定期的にテーマを決めて所蔵資料を紹介する企画展を行っています。

今年度は、「こんながあります。文書館の歴史資料」と題し、文書館所蔵の歴史資料の中から、歴史的に貴重ながらも、なかなか閲覧の機会がなかった「知る人ぞ知る」資料を紹介します。展示されている資料は複製になりますが、閲覧室にてお手続きしていただきますと現物を手に取ることができます。

○第1回

「江戸時代のお買い物 ―越後・佐渡における消費生活―」

〔5月26日(火)から12月13日(月)まで〕

(特別企画展開催期間の10月27日(火)～11月8日(日)は除く)

江戸時代は250年間にわたって平和が続き、経済活動が活発に行われた時代でした。貨幣制度や流通網が整備された結果、庶民の消費が活発となり、「通帳(かよいちょう)」などの商取引を示す文書が大量に作られました。

当時の人々は何を買い、どんな生活をしていたのでしょうか。ぜひ御覧ください。

○第2回

「馬と越後・佐渡(仮)」 ※詳細は企画中です。

〔12月15日(火)から令和9年5月24日(日)まで〕



〔第1回企画展 1階エントランスホール〕



〔第1回企画展 2階閲覧室〕

◇令和8年度

「古文書にふれよう週間 ―佐渡出身の実業家・益田孝と三井財閥―」 開催案内

当館よりすぐりの古文書を、文書館・県立図書館・県立生涯学習センターの三館合同企画「学びピア TOYANO」の期間に合わせて展示します。展示された古文書は、一部を除き、手で触れ、めくることができます！

今年度は、益田孝文書を展示します。佐渡国相川町に生まれ、15歳で江戸幕府の遣欧使節団に随行。維新後は三井物産の社長に就任し、我が国の近代化をリードした、益田孝の実像に古文書を通して触れていただきます。

○日時: 令和8年10月27日(火)～11月8日(日)

9時30分～17時

連動して下記の**関連イベント**を開催します。

※ 各企画の詳細、申込方法は文書館ホームページを御覧ください。

○ **歴史講演会**

「益田孝とその系譜」

講師:余湖明彦氏(「佐渡島の金山」を未来につなぐ会)

[10月31日(土)13:30～15:30 県立文書館ホール]

* 申込開始:9月30日(水)9:30

○ 「学びピア TOYANO」特別企画

益田孝文書展示解説

[11月8日(日)11:00～12:00]

* 申込開始:10月7日(水)9:30

文書館バックヤードツアー

[11月8日(日)13:00～14:00]

* 申込開始:10月7日(水)9:30



【展示予定資料】

E2404-1-1 益田家古文書 第巻号

(益田家系図・由緒書・勤役仰渡書簡留書)

令和7年度に閲覧可能になった受贈文書

新たに閲覧可能となった受贈・受託文書を紹介します。

請求番号	文書名	概要
E2105	頸城郡岩室村 庄屋文書	元禄4年～昭和8年。全626点。 岩室村(上越市浦川原区)の庄屋が作成・授受した文書からなる。岩室村の年貢・諸役、質地、小作、領主支配、庄屋家の家政、近隣村々との対外関係文書で構成され、熊川新田(上越市板倉区)と小沢村(上越市板倉区)の庄屋文書が一部をなしている。近世中期～近代初頭にかけての幕領村の変容をうかがうことができる。
E2303	八木千恵子氏収集 歴史資料	寛政11年～令和5年。全297点。 郷土史家の八木千恵子氏(文書館元会計年度任用職員)が収集した刊本・行政刊行物を主とする資料群。佐渡金銀山関係資料のほか、佐渡の歴史に関する資料が多い。その他、旧吉田町教育委員会が作成した文書目録、新潟市郷土資料館主催の古文書解説講座資料などがある。
E2404	益田孝文書	宝暦8年～平成18年。全44点。 佐渡出身の実業家、益田孝(1848～1938)および佐渡奉行所地役人をつとめていた益田家に関する文書類。益田孝(鈍翁)は大蔵省を経て、三井物産設立とともに同社総轄に就任し、三井財閥発展の基礎を築いた人物。 交流のあった伊藤博文・山県有朋・井上馨・松方正義・黒田清隆らの元勲や渋沢栄一・福地源一郎らの財界人やジャーナリスト・文化人の書簡も収録。

請求番号	文書名	概 要
E2306	近代絵葉書 コレクション	近代、1点。1冊のアルバムに収められているが全部で87枚ある。皇室、日露戦争、陸軍飛行機、新潟の名所等。
E2308	昭和10年代刊行 各種新聞	昭和11～12年、6点。昭和11年12月、昭和12年9月の各種新聞（一部）。
E2401	藤田東湖正気歌拓本等	近世、近代2点。藤田東湖生気歌拓本、西銘（竹雪甲斐寧 書）の書軸2点
E2403	昭和25年吉田中学校 学級日誌	昭和25年（1950）に書かれた吉田中学校（現燕市）の学級日誌。1点。
E2407	須頃郷地区土地区 画整理業関係刊行物	平成4年、2点。須頃郷地区土地区画整理事業の概要およびパンフレット。三条・燕土地区画整理事業一部事務組合発行。
E2408	廣益正字通	明治9年、1点。明治期に刊行された漢和辞典。
E2501	昭和22年5月3日 政令第15号	昭和22年、1点。内務省発行。町内会、部落会等の解散、町内会長、部落会長等の4年間の継職禁止等を定めたもの。
E2502	新潟県知事 北川信従之書	大正5、6年頃、1点。北川信従（1860～1924）は高知県安芸郡北川村出身で俳号烏山。
E2505	寛政7年荊羽郡加納村 光賢寺異法調書付	寛政7年、1点。現柏崎市所在の浄土真宗光賢寺が、家族や檀徒の中に信仰が禁止されていた宗教・宗派の者がいないことを申告した文書の写。
E2507	下美守郷高附帳ほか 各地文書	明和5～明治6、4点。寛政8年五人組御仕置帳（安田町渡場）、嘉永4年下美守郷高附帳（柿崎町下小野）ほか全4点。
E2509	刈羽郡別俣村役場文書	明治22～33年、6点。別俣村（現柏崎市北条）役場が作成。

令和8年度 10月以降の主催講座一覧

【古文書解読講座】

講座名	期日	会場	定員	申込開始日
はじめての古文書講座（秋季）	11/14・21・28（土）	大研修室	30名	10/14（水）
古文書解読講座（冬季）	A：12/2・9（水） B：12/4・11（金）	大研修室	45名	11/4（水）

※ 時間はいずれも午後1時30分から午後3時30分までの2時間です。

※ 各講座ともテキスト代として、100円が必要です。

※ 古文書解読講座（冬季）については、A・Bコースともに同じ講師、同じ内容です。

【文書館歴史講演会】

「益田孝とその系譜」講師 余湖 明彦 氏（「佐渡島の金山」を未来につなぐ会）

期日	時間	会場	定員	申込開始日
10/31（土）	13:30～15:30	ホール	180名	9/30（水）

※ 受講料は無料です。オンライン視聴も受け付けています（45名）。

【歴史講演会タイアップ企画】

企画名	期日	時間	会場	定員	申込開始日
益田孝文書展示解説	11/8(日)	11:00～12:00	閲覧室	20名	10/7(水)
文書館バックヤードツアー	11/8(日)	13:00～14:00	閲覧室・書庫	20名	10/7(水)

※ 申込方法等の詳細は、新潟県立文書館ホームページの各「新着イベント」に掲載します。

※ 当初予定しておりました特別企画展解説講座は、歴史講演会タイアップ企画として実施します。

文書館公式 SNS

文書館では、各公式 SNS を運用しています。所蔵資料の紹介、主催事業（古文書講座、歴史講演会等）の案内、臨時休館等のお知らせなど最新の情報発信を随時行っています。ぜひ御利用ください。



X(旧 Twitter)



Instagram

アーキビスト 文書館職員随想

早いもので、今年もまた年賀状についてのニュースを見聞きする時季となった。日本郵便の発表によると、令和9年用の年賀はがきの当初発行枚数は、前年比25.7%減の約5億5600万枚で、16年連続の減少とのことである。実際、私の身近でも「年賀状じまい」の宣言をする人は年々増えているという実感がある。その背景には、SNSの普及、ライフスタイルの変化、負担軽減、コスト削減、環境への配慮などがあるが、年賀状を受け取る側からすると、子どもの頃から慣れ親しんだ正月の楽しみが1つ減るようで寂しい気持ちにもなる。

年賀状はほんの一例に過ぎず、現代社会ではペーパーレス化が確実に進展している。このままいけば、紙に書いて伝える、紙に書いて残す、という文化がいずれ消滅しそうな勢いである。実際に、当館（歴史公文書室）で受け入れる特定歴史公文書（本県職員が職務上作成または取得した文書のうち、歴史資料として重要だとして知事に移管された文書）については、令和6年度の受け入れ分から、スキャンして電子データに変換したものを保管することが原則となった。当館は、平成4年の開館以来34年の月日が経過し、県史編さん室から引き継いだ膨大な資料群のほか、寄贈や寄託の形で受け入れてきた文書が年を追うごとに増加し、書庫が飽和状態に近づいている。特定歴史公文書の電子化は、この問題を解消する救世主になるかといえ、実は必ずしもそうではない。予算の問題は別として、公文書の中には、大型の図面や綴じられたものなどスキャンが容易ではない文書もあるためである。また、仮にスキャンができたとしても、紙の質感や風合いまでは電子データには残せない。スキャンのために綴じを解けば、それは文書の本来の姿の改変行為となるのだ。

さらには、電子データの寿命についてもよく確かめる必要がある。当館が書庫に保管している多数の古文書は、紙だからこそ今日まで残っているとも言える。一般に紙媒体の文書は、適切に保管すれば100年以上は持つとされている。一方、電子データは高品質な光ディスクに保存すれば最大100年持つこともある、という表現にとどまる。今後の技術革新により、電子データの寿命が延びる可能性は大いにあるが、紙の良さが再認識され、紙媒体に回帰する可能性もない訳ではないのかもしれない。図書館が収集する一般書籍とは違い、文書館が収集する文書というのは、一度失うと再入手することが極めて難しい。紙で残すのか、電子データで残すのかについての議論は、この先まだしばらく続きそうではあるが、1つだけ言えることは、いずれの方法で残すにしても、適切に管理して100年先、200年先の県民に確実に伝えていかななくてはならない、ということである。

私たち文書館職員は、県民共有の財産を扱っているものであり、その後世への継承という責任の重さを再認識しなければならない、と職場の机上に山積みになった書類を眺めながら思ったのであった。

編集・発行 新潟県立文書館

〒950-8602 新潟市中央区女池南3丁目1番2号

TEL 025-284-6011

E-mail archives@mail.pref-lib.niigata.niigata.jp